

令和7年度岩手県海岸漂着物対策推進協議会 議事録

開催日時：令和8年1月7日（水） 10時00分から12時10分まで

開催場所：岩手県議会棟1階 大会議室

出席構成員：渋谷晃太郎構成員、早川淳構成員、内田尚宏構成員、山本亮構成員、
佐々木安彦構成員、工藤直樹構成員、宗形金吉構成員、信田陽一構成員、
鈴木和昌構成員、南幅嘉人構成員、井戸喜六構成員（代理）、杉山直樹構成員、
和美邦彦構成員、金野久志構成員（代理）、大沢義時構成員

事例発表・オブザーバー：漂着ゴミ回収ネットワーク加藤昭一代表

1 開会

これより、令和7年度岩手県海岸漂着物対策推進協議会を、開会いたします。

この協議会は、海岸漂着物対策推進法第15条第1項の規定に基づき、関係者間の連携を促進しながら、岩手県の海岸漂着物対策を総合的かつ効果的に推進するために設置しているものです。

2 挨拶（岩手県環境生活部資源循環推進課総括課長）

資源循環推進課の古澤でございます。

構成員の皆様におかれましては、日頃から循環型地域社会の形成に向け、農業、漁業、商工業、学術研究など各分野からお力添えをいただいておりますことに感謝申し上げます。

さて、皆様御承知のとおり、プラスチックを含む海洋ごみは世界的に大きな問題となっており、国連環境計画の試算によると、世界全体で毎年2千万トンものプラスチックごみが湖、河川、海洋に流出しているとのことです。

自然環境中に流出したプラスチックは細分化されてマイクロプラスチックとなり、食物連鎖によりヒトを含む多くの生物に健康上のリスクをもたらすことが指摘されています。

こうした海洋プラスチック汚染の問題もあり、国では、令和4年4月に「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」を施行しました。

これにより、プラスチック製品の設計から排出、回収、リサイクルに至るライフサイクル全般に関わる事業者、自治体、消費者が相互に連携し、プラスチックの排出抑制、資源循環に取り組んでいるところです。

加えて、持続可能な社会の実現のためには、サーキュラーエコノミー、循環経済への移行が必要であり、次期岩手県循環型社会形成推進計画において「目指す姿」に明示し、事業展開を通じて、海洋ごみ対策に取り組むこととしております。

このような中、本日は、漂着ゴミ回収ネットワーク代表の加藤様から、漂着ゴミの回収・組成分析等の事例発表をいただきます。

この組織は、6年前から漂着ごみを回収し続け、岩手県の海洋環境保全に多大な貢献をいただいているボランティア団体です。

長年の取組に心から感謝申し上げます。

最後に、この協議会では、各分野毎の海岸漂着物対策に関する取組が共有される良い機会ですので、

それぞれの専門分野の視点から忌憚のない御意見をいただければ幸いです。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

3 事例発表（漂着ゴミ回収ネットワーク加藤昭一代表）

【事務局】

加藤様は、宮古市を中心に、漂着ごみの回収活動を精力的に展開しておられるボランティア団体の代表であります。

本日は、岩手県沿岸でも確実に進行している海洋プラスチック汚染の実態を踏まえ、現場で培った視点から、構成員の皆様への話題提供、参考情報となるよう、「漂着ゴミ回収ネットワークの取組と回収したゴミの組成データの紹介」というタイトルで、海洋ごみ回収活動の事例発表をいただきます。

それでは加藤様、よろしくお願いします。

○ 加藤昭一代表（漂着ゴミ回収ネットワーク）

御紹介ありがとうございます。

日頃の活動をこの場で報告する機会をいただいたことに感謝いたします。

今までの取組と、ごみを拾いながら見えてきたことを報告させていただきます。

私たちは、シーカヤックを楽しみながら、漂着ゴミを回収している市民活動組織です。海洋プラスチック汚染の軽減を目的にボランティア4原則にこだわって活動しています。漂着ゴミの回収体験や、作品展などを行って、海洋プラスチック汚染問題の啓発にも取り組んでいます。

活動の原点は、動力船では海からの上陸が難しく、陸域からも容易にはたどり着くことができない浜に打ち上げられていた海ごみを見たことです。

元々は、3.11で家が流されて、色々な支援を受けたことをきっかけに、自分の持ち駒で、その受けた支援を引き継いでいけるような活動ができないかということで、被災後の海をシーカヤックで案内する活動を始めました。

被災後の海と言いましても、変わったところは何もないのです。

そういう自然のものというのはあまり影響を受けないってということと、流された町、田老が地元なのですから、何度も何度も同じ目にあって、人が亡くなっていて、そういうまちの姿を、復興の姿とあわせて、海側から見てもらいたい、そういう思いも込めて活動していました。

震災前に一人で漕いでいるときにはあまり浜に上がる機会はなかったのですが、案内するようになって浜に上陸するようになり、漂着ゴミの深刻な実態が見えてきて、こうした活動を始めました。

【7ページ】

これは漂着ゴミをシーカヤックで回収している様子です。

結構大きなゴミがあるので、シーカヤックの中でも幅の広いシットオンタイプという結構大量のゴミを運べるタイプのものを用いて回収・運搬しています。

風いで海が穏やかだったらシーカヤックっていうのはどこでも上陸できるので、こういう活動というのはシーカヤックならではの環境的な貢献なのかなと考えてやりがいを感じています。

【8ページ】

そういうことをしているうちに、海洋プラスチック汚染問題について少しずつ、勉強というか知

識を持てるようになってきた。そして車で素通りしていたような浜のごみも気になって、拾い始めました。

【9 ページ】

拾って回収して持ち帰るのがちょっと大変なので、一度拾い上げた浜に、大きな資源用の網袋を置いておいて、隙間時間などに、浜に寄ってゴミを拾っては入れる、いっぱいになったら回収するという活動をしていました。

【10 ページ】

で、そうやって拾ってるうちに、何か、入っていることがあるんですね。

誰かが入れてくれる。

それで、これはもしかしたら、仕組みづくりとして面白いのではないかな、と思うようになりました。誰か散策に来た人とかが漂着ゴミを見つけて回収活動に気軽に参画できる仕組みです。

また、清掃活動に関心を持った人の受け皿がないと感じています。こういう網袋を置いとけば、環境活動に関心があるけれども中々参加できない方の受け皿になるんじゃないかなと。

組織単位の活動でなくても個人的に、入れてもらえるんじゃないかということで、「どのくらい入れてもらえるか実証実験中。散策がてら拾ってもらえるように網袋を仮置きしています」という印刷物を中に入れてみました。

そうすると、結構、少しずつですけども、入れてくれる人が増えてきて。去年末現在で 39 ヶ所、宮古市の浜に設置しています。

一番下の、右から3番目が藤の川っていうリアスハーバー裏の海水浴場なのですが、この浜は、いつも拾ってくれる人がいます。2番目の写真は浄土ヶ浜の裏側の蛸の浜というなかなか風情のある浜ですが、地元の人が散歩がてら拾って入れてくれるので、ここも溜まったものを回収するだけになっています。

【11 ページ】

回収したごみは、重さを量って事業系・生活系・漁業系と大雑把に分類し記録しています。

左の上の写真は、去年重茂の漁師の方々と一緒に、与奈というところの漂着ゴミを拾い集めて、それを分別している様子です。

また隣の写真は、月 1 回ぐらい、わかたけ学園っていう障害者支援施設があるんですけども、このメンバーの方々が分別に協力してくれているところです。

重茂中学校の先生が、積極的に漂着ゴミの啓発を実施しており、千鶏という海岸の漂着ゴミの回収活動を中学校の生徒達と実施し、分別計量まで一緒にやってくれた様子です。この時は重茂小学校の生徒も手伝ってくれました。

右下の写真のように大雑把なデータですけども、各浜の実態が見える化するために記録し、ホームページで公開しています。

【12 ページ】

宮古市と連携した海洋ごみの処分ということで、宮古市では海岸漂着物等地域対策推進事業を使って漂着ゴミの回収用コンテナボックスを各漁港に設置しています。各漁港に設置されたボックスに集めたゴミを分別計量した上で入れて、定期的に回収してもらっています。

また、設置した実証実験の網袋が中のゴミごとなくなっていることが何度かあり、これは恐らく

地元の清掃活動で多分回収してしまったと思われるのですが、何か住民に網袋の取組を周知する方法がないか宮古市の環境課に相談したところ、海水浴場の海開きの時に集まった方々に説明したらどうかと提案を受け、メンバーに紹介してもらった様子が下の写真です。右下の写真は、これをきっかけに関心を持ってくれた環境課の推薦で知事からの感謝状をもらっている様子です。

【13 ページ】

活動をしていると、たまに興味を持った外国人の方が参加してくれることがあります。

上の写真はオランダの方で、宮古市で漂着物の作品展を開催した時に立ち寄ってくれたことがきっかけで、シーカヤックの体験をしてもらったり、一緒に漂着ゴミの回収活動も体験してもらったりしました。

下の写真はフランスの女性で、興味を持って活動に参加してくれて、冬だったんですが、カヤック&潮風トレイル、片道シーカヤック、片道トレイルという企画に参加してくれた際の様子です。下の真ん中の写真は泡のようなものが海一面に広がっているのですが、このような海上では、音が聞こえなくなるので、そういう面白い体験をしてもらうことができました。カメラを構えている写真の先にはカモシカが写っています。市内の漂着ゴミの回収体験にも参加してもらっています。

【14 ページ】

あと地域の子供たちに自然体験や環境活動の機会を提供しています。

宮古と釜石の少年野球チームの監督をやっている方が漂着ゴミ回収ネットワークの活動に興味を持ってくれて、体験に参加してくれました。

また、宮古シーカヤック協会の子ども会の体験会にも協力しています。その時は、ゴミ拾いの体験もしてもらって、海洋プラスチック汚染の問題についても伝えました。

こうした活動を通して感じるのは、現代は、子ども達が自然体験をする場、機会が非常に少なくなっているということです。大人がついていないで海や川で遊ぶのは危ないのはその通りなのですが、危ないから遠ざけるだけでなく、大人の責任として、一定程度は自然の中で遊ぶ機会を提供した方が良いのではと常々思っています。

普段人工物に囲まれた生活をしていると、自然に対する感覚が鈍化するような気がしています。子ども達をこのような自然の中で遊ばせると、「楽しい！楽しい！」と言って思い切り遊ぶんですよ。特に女の子が。元気よく率先して遊びます。子ども達に自然の中で遊んでもらう機会を提供することで、自然に対する感覚をまだ取り戻してもらえると感じています。

下の写真は、海洋技術短大の学生が参加してくれた際の様子で、参加した人は、「ゴミが多くて驚いた」、「海がきれいだった」、先生からは、「面白い機会だった」という感想をいただいています。

【15 ページ】

海岸漂着物を使った作品展と工作体験の様子です。

漂着ゴミで作った作品の展示と併せて、重茂中学校、重茂小学校の生徒が海洋ごみをテーマに調査研究した結果をレポートにまとめたものを一緒に展示しています。

右下の写真は、漂着ゴミとして回収したロープを来場者が自由に網に巻き付けて、何か作品にならないかなと思って始めた企画です。アイーナで3月末まで置かせてもらっていますので、是非皆様もお越しの際は一人1本ロープを巻き付けてください。面白いですよ。

【16 ページ】

こちらは去年1年間で回収したごみの回収実績です。棒グラフの方は、漁業由来、生活由来、事業由来で分けたものです。やはり漁業由来が多い。右の円グラフは素材別に内訳を示したもので、プラスチックが一番多い。マイクロプラスチックの元となるものがこれだけあるということ。金属のような重い物は宮古湾内から出るゴミや川を下って流出したゴミが多いという印象を受けています。

【17 ページ】

こちらのページは、全体のうちプラスチックに限定して漁業由来、生活由来、事業由来に分けたものです。また、右の円グラフは漁業由来のプラスチック漂着ゴミのうち、種類別に割合を示したものです。ロープと浮き玉のようなブイ、これが大きなウエートを占めています。緑のプラスチック他という割合も多いですが、いわゆるサップ船という船外機船、FRP製の船なのですが、震災で壊れたサップ船の残骸が結構あります。拾っても繰り返し打ち上げられてくるので、海の底には結構沈んでいるんだろうなと思っています。

【18 ページ】

左の写真は真崎の動力船では上陸できない海岸に始めて上陸して回収している様子なのですが、ペットボトルが大量にありました。また、右上の写真は宮古湾内の浜なのですが、白く見えるものはすべて発泡スチロールです。打ち上げられ、また風で飛ばされて大量に積み重なって層になっています。漂着ゴミは通常、打ち上げられてよく集まる所がある、あるいは波に流されて溜まったものが一掃されることを繰り返しているのですが、ここは風で飛ばされたものが沢の上流に向けて滞留しているので溜まりっぱなしになっている。

右下の写真は種刺海岸という海岸で潮風トレイルのルートになっている箇所です。盛岡山岳会から集めたゴミを引き取ってもらえないかという相談があり30Kgほどを引き取った後に、トレイルルートから1時間半ほどかけてアクセスして拾い集めた漂着ゴミです。網袋の下には浮き玉がずらっと並べてあります。漁業由来としては、ロープと浮き玉が多いです。これはまだ回収せずに残っています。

【19 ページ】

右下の写真で、大量の浮き玉が漂着ゴミとして打ち上げられている様子が分かります。右上の写真は、重茂半島の先の荒巻浜という浜ですが、この黒い物は何だか分かりますか？手前はロープなのですが、土のう袋です。漁業施設で養殖棚を設置するために重しとして土のうを使うと思われるのですが、砂が抜けてこのようにロープと絡まっています。一人で移動させるのが大変なくらい重く、体重をかけて少しずつ引きずるようにして波の来ない場所まで移動させました。

左の写真はロープと網袋の写真ですが、袋に入っているのは大体生活系ゴミです。漁業系ゴミは重さでは一番重いのですが、生活系ゴミは体積で多く、どちらが景観を損ねているかと言えば生活系です。軽くても大量に散らばっているので、かなり美観を損ねます。

【20 ページ】

左の写真、これ何だか分かりますか？網に絡まったアザラシです。結構大きなアザラシでした。右上の写真は、網がごちゃごちゃになって打ち上げられている様子ですが、非常に重く、回収もできずにいたら大荒れの時に海に流されてしまいました。それから1年くらいして、再び同じものが打ち上げられてきました。こういうものが、動物達にも影響を与えているということが言えると思います。

右下の写真はサギがテグスに絡まっている様子です。絡まったテグスを切った後も、弱ってしば

らく動けない状態でしたが、分別作業中に日の当たる場所に置いていたら、温まったのか次第に元気になってきて最後は飛び立って行きました。

【21 ページ】

事業由来の気になる発生源ということで、フレコンバックですね。土嚢袋として使われたフレコンバックが、長期間そのままになっている様子の写真です。フレコンバックの耐用年数は通常のもので1年、黒い耐候性のある物で3年とされていますが、この写真のものはそれ以上に放置されボロボロになってきています。こうしたものがコツコツ拾っている身としてはすごく気になる。

一番下の右側のものは、潮風トレイルの階段を土嚢袋で補修したのですが、長期間そのままです。草が生えてきている。こうしたものがマイクロプラスチックの元になっているので、こうしたものにも目を向けてもらいたいと思っています。

【22 ページ】

金属の漂着ゴミの由来を分類したグラフです。金属系で数として多いのは圧倒的に生活系が多いです、空き缶とかが多い。漁業系は数とすればそうでもない。事業系も港の施設とかが壊れた物が打ち上がっているとか、壊れた船の残骸とかなので数はそこまで多くはないです。漁業由来は様々な、カニ籠とか様々なものが打ち上げられてきます。

【23 ページ】

ペットボトルの回収本数を年ごとに示したグラフです。2019年から指標物として数え始めました。2024年から2025年にかけて大きく数が増えています、これは網袋の設置場所が増えたのでこれだけ増えています。2023年から重さも量っています。

【24 ページ】

活動を通じて感じたこととして、プラスチックは比重が軽く、陸域で生じたプラスチックは土に埋まらずに大雨で流されたり風で飛ばされ、やがて河川等を通じて海に流れます。海に流れ出たプラスチックは、自然分解に400年かかるとされていますが、水深50センチで紫外線量が半減すると言われています。紫外線がほとんど届かない海の底では、半永久的にそのままになってしまうということです。

プラスチック浪費社会という表現をしましたが、現代社会に暮らす誰もが、微小プラスチック汚染を未来に押し付けている当事者であり、一人分の責任があると思います。その責任は誰もがゼロではない。浜は、紫外線や打ち寄せる波によって海洋ごみの分解が進みやすく、マイクロプラスチック発生装置とも言えますが、海洋ごみが集まる場所でもあるので、劣化する前に回収すれば浄化装置にもなるという見方もできます。

あと3Rに加えて、環境に出てしまったゴミを拾ってもらう仕組みが必要だと思います。

また、金銭的なインセンティブよりも、楽しみついでに社会貢献。楽しみながら環境貢献の方が人材が集まり、地に足のついた創造的な活動ができるのではと考えています。

行政的なサービスの充実で、地域の助け合いが少なくなり、自治会の組織率が低下する中で、人口減少、高齢化、財源不足の状況下でも、持続可能なまちづくりには、助成金ありきの思い付きではない、地域の枠を超えた市民活動が今後ますます重要になってくるというのも拾いながら感じています。

マイクロプラスチックの問題は、カヤック体験に来てくれた子どもにも理解してもらえます。以

前新聞の取材を受けた際、「清掃や美化活動と何が違うのですか？」と質問を受けたことがあるのですけれども、環境活動と捉えないと、目につかない所はいいんじゃないかなってしてしまうので、プラスチック汚染を減らしていくことには中々結びついていかないと感じています。

【25 ページ】

行政にお願いしたいこととして、微小プラスチックの健康への影響が疫学的に証明されてからでは後戻りできないこと、プラスチックの浪費のツケが、未来に押し付けられていることを、行政には強く啓発して欲しいと思っています。

また、海岸漂着物等地域対策推進事業が目的としている海岸漂着物の回収・処理が、県と市町村が上手く連携してもっと進むようにしていただくと、活動していて感じています。

あとは、行政の方々やマスコミの方はどうしても発信力のある助成金からみに事業に目が向きがちなのですが、もっと市民活動にも目を向けて欲しい。どこで何が行われているのか見えてこないで、そういう情報を集めて、市民に参加の選択肢として情報発信してもらえれば、もっと連携して幅広い活動をやっていけるのではと思っています。

関係団体をお願いしたいこととして、漂着ゴミの現状を見て、感じて、知って欲しい。それから未来への環境責任を考えて非プラ製品や自然分解されるバイオプラスチックへの切替を検討し、できないものは積極的にサーキュラーエコノミーに取り組んでほしいと思います。岩手県が先行して他県のモデルケースになるような取組をしてほしいと思います。

【26 ページ】

最後のスライドです。海洋汚染は、地球温暖化、生物多様性の喪失と並ぶ深刻な環境問題とされています。

漂着ゴミ回収ネットワークは、今を生きる一人分の責任に立ち返り、「ハチドリのひとしずく」をモットーにしています。「ハチドリのひとしずく」は、アンデス地方の言い伝えなのですが、山林火災に口ばしでひとしずくずつ水滴を落とすハチドリに対して、動物達が「そんなことして何になる」と言うのですが、それに対してハチドリは「私は、私にできることをしているだけ」と答えたという物語です。

初めてこれを聞いたときは、ピンと来なかったのですが、こういう活動をしていて、この話が次第に響いてくるようになりました。

そして、ボランティア4原則にこだわった試行錯誤を愉しみながら、他の市町村でも今から始められる、漂着ゴミ回収の仕組みを探っています。誰もが入れられる網袋は、一つ手ごたえを感じている取組ですので、今後地元自治体とより連携して発展させていければと考えています。

以上です。ありがとうございました。

【事例発表に対する質疑応答】

○佐々木安彦構成員（岩手県漁業協同組合連合会）

岩手県漁連の佐々木と申します。地道なボランティア活動、大変ありがとうございます。私も浜の人間でございまして、恐らく浜で子ども達だけで遊んでいた最後の世代かと思います。当時はサッパ船、手漕ぎの船で、浦々手の届かない所まで行って遊んでおりました。あの楽しさというのは忘れられません。今は大人と一緒になければ中々自然体験はできませんが、現代の子ども達にそのよう

な自然の中で遊ぶ貴重な機会を創っていただき、また潮風トレイルと組み合わせた活動など、時流に合わせた形で様々発信・展開していただいていることに非常に感謝しております。

浜と直接的に関わりのあるのが漁業ですので、目立つ形で色々な部分のゴミが出ていると思われます。今、漁業者の中でも若い世代で、色々なことを考えていらっしゃる方がいて、海ゴミと絡めて浜の貴重さを発信している方もいます。一方で御高齢の方の中には、昔ながらの考えで、こうした海洋ゴミの問題を当たり前のこととして捉えている方もいらっしゃると思います。近年の海洋環境の変化、特に急潮、塩害期に非常に急激な海流が生じて定置網や土嚢に被害を及ぼし、それがゴーストフィッシングにつながっている懸念も認識しています。将来に向かって持続可能な漁業を目指して、海洋ゴミ問題についても啓発しながら、一緒に取り組んでいければと思います。

質問ですが、重茂地区で行った活動では、重茂漁協と何か接点などはありましたでしょうか。

○加藤昭一氏（漂着ゴミ回収ネットワーク）

重茂での回収活動では、メンバーに一人重茂の漁師の方がいて、その方が重茂漁協に掛け合って、有線で情報を流したり、チラシを配ってもらったりして、漁協からも結構な人数の方に一緒に取り組んでもらっていました。

○佐々木安彦構成員（岩手県漁業協同組合連合会）

そうした取組を横展開させながら、個別に女性部など一生懸命取り組んでいるところもありますので、そうした活動とも連携し、協力していきたいと考えておりますので今後もよろしくお願いいたします。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワーク）

大変素晴らしい活動であるとともに、データが素晴らしいです。毎年この協議会に参加して、いつも重さでしかデータが出てこなかったのが、数のデータが出てきたことに、現場の地道な活動の結果だと思い、感銘を受けました。

中でも、産業系のごみが重さでは一番多いが、数では生活系ごみが多いとおっしゃっていました。このデータは、市民に対し伝える際に、やはり生活系ごみが多いんだよ、だから気を付けようと繋げていけると思うのです。生活系ごみの中では、どのような物が多いのでしょうか、ペットボトルでしょうか。

○加藤昭一氏（漂着ゴミ回収ネットワーク）

ペットボトルと、発泡スチロールも多いです。それ以外にはワンウェイの容器包装ですね。あとは履き物など、生活に関わるあらゆる物があります、ほとんどすべてです。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワーク）

重量で言えばどうしても漁業系が大きく、だから漁業関係者は気を付けてください、となるのですが、数では依然生活系も多いということですね。これは各自が日々の暮らしで気を付ける事が大切と分かる。ありがとうございます。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

御発表ありがとうございました。この規模で活動されていて、ちゃんとデータも取っている団体というのは、全国でも僅かだと思います。このようにデータとして示されているということは非常に大きな意義があったと思います。とても感銘を受けました。一点お伺いしたいのが、色々な浜で回収活動をされていて、今回示されたのは合計値、総和としてのデータだと思いますが、宮古湾内の位置や距離によって、ごみの組成が違ったり、あるいはどこも同じだったり、浜ごとの特徴というのが検出されるようなデータはお持ちでしょうか。

○加藤昭一氏（漂着ゴミ回収ネットワーク）

ごみの回収量が多く、人数も限られているので、厳密な調査票を用いて細かく分類はできていません。ゴルフボールが多い浜があるのですが、そのような場合はゴルフボールだけで重量を計測していますが、それ以外は缶やビン系など大雑把な括りで計測しています。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

非常に細かくデータを取ってしまうと、調査規模や範囲を縮小せざるを得ないケースがあると思うので、今行っているカテゴライズで浜ごとにデータを比較するだけでも、非常に面白いデータとなると思います。

もう一点お聞きしたいのは、割と生活系ごみが多いことを含めて、地元のごみ、湾内で発生したごみが多いのではというお話だったと思います。私も漁業系ごみをずっと見ており、ブイに関しては国内のものが多い印象があるのですが、いわゆるアナゴ筒の返しが非常に多い漁具のごみで、その多くが韓国系です。回収された漁業系ごみに関し、例えばフロートの文字表記などから、外国製漁具のごみの割合について、体感でも良いですので、もしデータをお持ちでしたら教えていただけますでしょうか。

○加藤昭一氏（漂着ゴミ回収ネットワーク）

どれが外国製ごみなのか、今一つ分からないのです。ペットボトルもそうなのですが、表記が残っていれば良いのですが、大体遠くから流れてくるごみは外れているので。あとアナゴ系の三角形の返しの部分は大量にあります。あれのほとんどは外国製でしょうか。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

口径や形状からこれは韓国製だというのはある程度推測可能です。十数種類あるのですが、そのうちのほとんどが韓国製のものだと思います。

○加藤昭一代表（漂着ゴミ回収ネットワーク）

宮古湾に流れる一番大きな川は閉伊川ですが、閉伊川から流れ出たごみというよりは、外から流れ着いたごみの方が多いという印象です。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

分かりました。貴重なお話ありがとうございました。

4 議事

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

それでは議事に入ります。本日の議題は「令和6年度の海岸漂着物等の調査結果」、「令和6年度及び令和7年度における県の海岸漂着物対策の取組状況」とともに、「今後の取組方針について」となっています。

まず、(1)「令和6年度における海岸漂着物等のモニタリング調査結果について」、事務局から説明を受け、それを踏まえて意見交換を行うこととしたいと思います。それでは、事務局から説明をお願いします。

【議事1：令和6年度における海岸漂着物等のモニタリング調査結果について】

事務局から資料1（P31～P43）により説明。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

ここまでの事務局からの説明に対して、構成員の皆様から御意見、御質問等を伺いたいと思います。リモート参加の委員におかれても、ご発言がありましたらチャット欄でお知らせください。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワーク）

32ページの回収状況について、令和5年度と比較して、令和6年度の回収量は減っており、良い数字だなと思って見ていたのですが、例えば、令和元年度にプラスチック類12.3トンあったものが令和6年度は7.1トンとなり減っている。これは、回収が進んで、若しくは排出する人が減ったことにより減少しているのでしょうか。もしそうだとすれば、対策が進んでいると読んでいいのか、令和元年度は災害があつて多かっただけなのか、その辺の分析があれば教えてください。

【事務局回答】

令和元年度は、令和元年台風19号の影響により、プラスチック類だけでなく全体的に海岸漂着物の回収量が多かったものです。令和6年度に回収量が少なかったのは、発生抑制対策の効果が表れたというよりは、海流等の影響によりたまたま例年よりも漂着量が少なかった、と考えております。

○工藤直樹構成員（岩手県商工会議所連合会）

42ページの海洋プラスチックごみ実態調査の結果について、その年によって特徴的なものもあるということでしたけれども、この数値がどのようなことを意味するのかを教えてください。先ほどオブザーバーの加藤様から疫学的な証明はまだされていないというお話もありましたが、示された岩手県沿岸海域におけるマイクロプラスチックの回収量の数値は、人体への影響があるということの意味するのか、まだ大丈夫なのか、分からないけれども数字だけ示したものなのか、意味合いを教えてください。

【事務局回答】

個数密度から言いますと、令和3年、令和4年に環境省が日本海沿岸で実施した調査結果とオーダーとしてはほぼ同じ結果となります。健康影響については、現在色々な研究者が研究を進めているところで、今回御報告した内容は1mm～5mmのサイズのプラスチックなのですが、健康影響が懸念されているのは、更に小さいナノプラスチックと呼ばれるものです。1mm～5mmのサイズの安全性も含め、人体への健康影響についてはまだ明らかになっていないのが現状です。

【議事2：令和6年度における海岸漂着物等のモニタリング調査結果について】

事務局から資料2、資料3、資料4（P44～P63）により説明。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

事務局から、令和6年度、7年度の取組状況について報告がありました。報告内容に対して構成員の皆様から御意見、御質問等を伺いたいと思います。

○鈴木和昌構成員（浄土ヶ浜ネイチャーガイド）

浄土ヶ浜ネイチャーガイドの鈴木と申します。今回会議の方には初めて参加させていただきます。資料を拝見させていただき、加藤さんの取組や全県を挙げた啓発活動、とても素晴らしいと思っております。様々な清掃活動や啓発活動によって、県内から排出される三陸海岸のごみというのはかなりの部分で減っていくんだろうと。一方、疑問に思っておりましたのは、通常業務の中で、浄土ヶ浜周辺でガイドを行っていて、加藤さんほどではないですがごみ拾いも行っていて、韓国や中国からの菓子の包装などがかなり見受けられ、どういう状況なのかなと思っていました。示されたデータにおいても外国由来のごみの割合についてはありませんでしたし、加藤さんのデータでもそこまで詳細な分類はできていないようでした。つまり外国由来の割合ですね、全県を挙げて取り組んでいけば、三陸海岸に漂着するごみは果てしなくゼロに近づいていくのか、それとも隣県や外国由来のごみが一定程度あって、そちらとの連携も重要なのか、海流や気象状況によっても変わってくるのかもしれませんが、今後そのあたりのデータ収集も必要になってくるのではないかなと。

【事務局回答】

岩手県内で啓発活動や清掃活動を進めていくことで、岩手県の沿岸部から排出されるごみを減らす効果は出てくると思いますが、御指摘いただいたような海外由来のごみも岩手県沿岸において一定程度回収されている状況です。現在実施している定点観測によるごみの組成データ調査において、より詳しく出所の検証を進め、より効果的な対策を今後も検討していきたいと思っております。

また補足として、今回テーマとなっている海岸漂着物は、当然岩手県だけ、日本国だけの話ではなく、全世界的な問題です。その中で岩手県にできることは、隣県や、本日お集まりいただいているような、あらゆる関係団体、主体と連携しながら、プラスチックの削減やごみ排出時点での管理適正化、そして流出してしまったものについては回収を進めていくことが重要であります。そして、国に

においては他国との連携体制の構築を行うことで海岸漂着物は減らしていけるものと考えております。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワークング）

今の話に関し、日本における漂着ごみについてはアジア系のものが多いのはその通りなのですが、川や街にごみを捨てるのは良くないよ、ということを市民意識に訴えかけることも重要だと感じております。実は、以前アラスカで国際会議に出席した際に、アメリカのポートランドから来た方、あとハワイから来た方に、流れ着いてきているごみには日本語が書いてある、流すな、と言われました。やはり言われましたように他国との連携ですよね、そして日本は被害者でもありますけれども加害者でもある、ということを市民に伝えていく必要はあるんだと思います。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

今のお話を私からも補足させていただくと、環境省では、ブイやプラスチックボトルに記載されている言語表記などを調べています。すべてのプラスチックごみについて由来を調べるのは不可能ですが、漁業系のブイやプラスチックボトルなど特定のカテゴリに絞ることで、国内由来か海外由来かの割合を算出することが可能かと思います。

また、先ほど御発言がありましたとおり、こちらが排出したごみは黒潮の海流の影響でアメリカに行ってしまう。日本はアジアを中心とした海外由来のごみが流入してくるとともに、排出源でもある、というのは内田構成員の御発言のとおり留意しておく必要があると感じました。

私の質問に移ります。GISの取組、いわゆる情報の見える化、共有の仕組みづくりは非常に面白いなと思って聞いていたのですが、ごみがあった所を報告するという仕組みと組み合わせると面白いなと思いました。街中のごみの中で目立つものを投稿できるレイヤを追加し、その情報から実際の回収につなげるなどすればそれも面白いのかなと。そういったことが機能的に可能なのかどうかということと、もう一点は盛岡市のクマ出現マップのように、位置情報を投稿できるマップは市内全域が対象なのか、県内全域なのか、空間スケールはどうなっているのか質問させていただきます。

【事務局回答】

回収されたごみだけでなく、回収できなかったごみを投稿する機能について、先ほど説明が不足しておりましたが、既にアプリの中にそのような回収不能ごみの写真などの情報を投稿できる機能があります。令和7年度の実績においてはそちらの投稿実績というのはなかったのですが、令和8年度以降、この機能も使っていただけるように呼び掛けていきたいと思います。

もう一点の範囲については、岩手県全域で投稿できるシステムとなっております。

○加藤昭一オブザーバー（漂着ゴミ回収ネットワーク）

多様な主体との協働という話に関して、岩手県は北上川が宮城県に向かって流れているのですが、岩手県と宮城県が協働してプラスチックを軽減していこうという取組は何かあるのでしょうか。

【事務局回答】

海岸漂着物そのものではないのですが、県境付近に不法投棄されたごみを隣県と共同でパトロールし、回収するという取組は実施しています。

○加藤昭一オブザーバー（漂着ゴミ回収ネットワーク）

流域連携については、いわて流域ネットワーキングで非常に積極的に実施されており、その成果が、宮城県側でどの程度出たのか分かるようだと、例えばこの取組でこのゴミがこれだけ減ったなど、面白いのかなと思いました。

もう一つは、海岸漂着物等地域対策推進事業が対象としているのは、漂着ごみなのか、それとも漂流ごみなのか、大船渡市の担当者からは以前漂流ごみがメインだと聞いたことがありますが、宮古市では、基本的に港に入ってきたゴミを対象に回収ボックスが設置されています。事業が本来対象としている海岸漂着ごみを目的とした活用となっているのか、どのように把握しているかお伺いしたいと思います。

【事務局回答】

海岸漂着物等地域対策推進事業は、環境省の補助金ですが、実際に海岸に漂着したごみの回収・処理を行っていただいているのがメインの事業となっております。それ以外にも一つの補助メニューとして、漁業者等のボランティア活動と連携した漂流ごみの回収・処理について補助するメニューがあります。こちらは、漁業者が操業中に網に引っかかった漂流ごみなどを回収し、市町村が設置した回収ボックスに入れていただければ、その処理費用は全額国庫補助対象となるということです。現在この漂流ごみの処理に取り組んでいただいているのは、山田町と大船渡市です。こちらは非常に高率の補助なので、県北地域の市町村にも活用いただけるよう呼び掛けていきたいと思っています。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

私の方から一点、資料3、県内でごみ拾い活動、数が増えているというお話があって、加藤さんの方からも最後御提案あったように、このようなどこで何をやっているという情報を市民に向けて分かりやすく伝えていけば、市民の方がより参加しやすくなるのでは、と思うので、去年よりも報告数が増えているし、何らかの方法で広報いただくと市民の方が参加しやすくなると思うので、御検討いただければと思います。

【議事3：今後の取組方針について】

事務局から資料5（P64）により説明。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

事務局から、今後の取組方針について示されました。第2期計画に定める基本方針ごとに方針が示されています。これらを基に、構成員の皆様から、それぞれの分野に関し、御意見・御質問、また

これまでの取組や今後の取組方針等ありましたら伺いたいと思います。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワークング）

2の漁業者向け普及啓発について、何か助成金などを活用した取組となるのでしょうか。

【事務局回答】

普及啓発については、環境省の補助対象から外れてしまった関係で、助成金等の活用は現在想定しておりません。

○内田尚宏構成員（一般社団法人いわて流域ネットワークング）

分かりました。まず今日、加藤さんの取組のお話を聞いて、感銘を受けました。この活動だなと思いました。その中で、課題だなと思ったのが、まず、大量に回収したごみの処理、この部分が市町村との連携体制の構築、どの程度のサイクルで処理されているのかということ。また、加藤さんが受け皿を作ろうとしておられるのは非常に素晴らしい発想で、ただ県内に加藤さんのような心あるボランティアの方が多いとは限りませんので、やはり何らかの支援があった方が良いのではないかなと。また、漁協さんというのは非常に海をよく知っておられるので、漁協との連携というのもあって良いのではないかなと思いました。

○加藤昭一オブザーバー（漂着ゴミ回収ネットワーク）

宮古市には、業者の都合もありますが溜まった都度処理いただいています。どの回収ボックスでも年に2～3回程度は回収・処理していただいていると思います。

○山本亮構成員（一般社団法人岩手県工業クラブ）

岩手県工業クラブとしては、このような環境対策を事業として打ち出している状況ではないのですけれども、会員事業所においては社会貢献活動として、会社の前や近隣の花壇を整備するなどの活動をしていただいているところです。ごみは内陸から、川を通じて海に流出するということを本日出席して改めて感じましたので、可能であれば本日の資料等を活用して会員にPRしながら、ハチドリのひとしずくとして、やれることからコツコツとやってみませんかという啓発活動をしていただければいけないなと思ったところです。可能であれば事業に盛り込んでいきたいと思ったところです。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

資料3の県内の清掃活動の取組状況を見ると、県内企業もかなり参画いただいております、恐らく岩手県工業クラブの傘下の会員企業も清掃活動に取り組まれているのではないかと思います。沿岸部を中心に会員企業にも呼び掛けを図っていただければと思います。ありがとうございました。

○佐々木安彦構成員（岩手県漁業協同組合連合会）

2の漁業者向け普及啓発について、加藤さんの重茂漁協パターンのような取組が応用できるのか

など思っております。青年部、女性部、地域地域、浜ごとに、有線などで呼び掛ければ集まっていくところもあるかと思いますので、そういったところも事例紹介させていただきます。

そしてもう一つ、チラシ配布となっていますが、海難事故防止研修会などの機会を活用して、私自らチラシの内容を説明しています。その際、一番目が輝いていたのが重茂漁協さんでした。その意味が本日分かりました。色々やっていただいていたのですね。今後続けていきたいと思います。

もう一点、事務局の方に質問なんですけれども、漁協への呼びかけは、令和8年度はいつ頃行う見込みでしょうか。

【事務局回答】

令和8年度はまだ未定ですが、水産振興課を通じてお知らせします。

○佐々木安彦構成員（岩手県漁業協同組合連合会）

お声がけいただければ一緒になってやっていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

○工藤直樹構成員（岩手県商工会議所連合会）

会員事業者それぞれが社会貢献活動の一環として清掃活動等を行ってるとともに、商工会議所としても海岸漂着物対策に限らず県から依頼があれば、その都度普及啓発等をさせていただいております。今後の取組方針の中では、県内事業者においてプラスチック使用を削減していくことが重要だと思っております。ただ、いわてプラごみ削減協力店について、187店舗というのは、県が以前から取り組んでいるエコショップいわての登録数と比べると少ないのではないのでしょうか。内訳を見ると、神子田の朝市が多いようです。従来から3Rに取り組まれているエコショップに、それに加えてプラスチック削減についても呼び掛ければ、エコショップ登録数程度には登録数が増加するのではないのでしょうか。一方、商工会議所にいますと、県のあらゆる部局からあれもこれもやるよう連絡があり、とてもじゃないが忙しくて手が回らないと事業者からの話を受けます。ある部では、取組が建設工事の評価に加点するメリットを設けているケースもありますが、それはそれで義務付けのようになり事業者にとって負担が大きい状況です。そういう意味では、やはりメリット、登録して取り組むことでどのようなメリットがあるのか、資料にはPR強化とありますが、その事業者にとってのメリットをどのように打ち出していくかがポイントとなると思います。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

その点については、事務局の方で引き続き検討を進めてください。

○宗形金吉構成員（岩手県商工会連合会）

今工藤専務がおっしゃったお話とほぼ重なるのですけれども、上部機関を通じて政府から色々な要請も来ますし、県からも要請が来るということで、傘下の各商工会に向けて、啓発してくださいと促しているところです。

本日お話を聞いた中で、対策の第一歩としては、見える化、というのが重要なのだろうと感じました。

活動事例や課題をしっかりと見える化することで、会社としても協賛して、理解して取り組む動きも出てくるのかなと。もう少し紹介というか、県民によく伝わるように発信していただければいいのかなと思いました。以上です。

○信田陽一構成員（全国農業協同組合連合会岩手県本部）

農業分野では、肥料に使われますプラスチックの低減ということで継続して取組を進めています。マイクロプラスチック削減のために、脱プラを進めているのですが、プラスチック製被覆肥料に比べどうしても収量が落ちるという課題も抱えており、肥料メーカーや県と連携しながら、脱プラの肥料の実証の取組を進めていきたいと思っています。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

私の知り合いの農家さんで、緩効性肥料にプラスチックがコーティングされていることを知らないでいて、それを知った際にどうしようということで、排水口に簡単なネットを設置して回収するというのを試していた方がおりました。見張っていないとすぐネットがプラスチック殻でいっぱいになるということもあったみたいですが、そのような簡単な取組でも良いので広げていただければ良いのかなと思います。

○鈴木和昌構成員（特定非営利活動法人浄土ヶ浜ネイチャーガイド）

県民に向けた意識付けが重要だと考えております。私どもの団体としては、市内で実施される清掃活動への協力であるとか、ガイド中の清掃活動などにおいて、そのような観点でどのようなことができるのか今後考えていきたいなと思っております。

○南幅嘉人構成員（岩手県市町村清掃協議会）

県内市町村、内陸と沿岸部で温度差があるのかもしれませんが、内陸の市町村においても、川を伝って海洋流出しないようそれぞれ取り組んでいることと思います。盛岡市では、今回資料の中で御紹介いただいた清掃活動を行っておりますし、資料に出てこない、海ごみをあまり意識せずに実施されている清掃活動も市内で展開されております。なるべくそうしたものも把握していきたいです。また、プラスチックごみの削減のもう一つの取組として、容器包装プラスチックごみの再資源化ということで、製品プラスチックの再資源化というのも、順次取り組まなければと考えておりまして、盛岡広域ブロックで新しいごみ焼却施設の整備ということで取組を進めておりますけれども、それを契機に製品プラスチックの再資源化ということで進めようと検討を進めているところですので併せてお知らせいたします。以上です。

○早川淳構成員（東京大学大気海洋研究所）

今後の方針についてこれで大変結構だと思います。ただ2点ほどお伺いしたいのは、ここで示されているのは大きなプラスチックがマイクロ化する二次マイクロプラスチックに焦点が当たっていると思います。一方で、私達の生活の中からは、例えば洗濯の排水で繊維くずなどから大量にマイクロプラスチックが出ますし、タイヤの摩耗から出るマイクロプラスチックも非常に多いと言われてい

います。普通に生活しているだけでもそうして大量にマイクロプラスチックが出てしまっていること自体があまり知られていない傾向にあって、そうしたことは漁協さんや小学生に範囲を絞らず、県民一人ひとりに啓発していく必要があるのではないかなと思いました。もう一点は、海洋プラスチックというのは、水面に浮いているものと漂着したものがメインではあるのですが、陸上から海に流出した量と海洋表層で観測されるプラスチックの量が全く見合っておらず、大部分は沈んでいると言われています。これは海洋プラスチックのミッシングリンクと言われています。

私は海底のプラスチックなどを調査しているので、漂着プラスチックだけでなく、海洋表層のプラスチックと海底に沈んだプラスチックにも目を向けた方がいいのではないかなと思いました。

○井戸喜六構成員代理（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

岩手河川国道事務所では、岩手県内の北上川流域において毎年春に一斉河川清掃を実施しており、2,600名ほどの参加をいただいております。流域市町村と連携して川をきれいにする図画コンクールを実施しています。今後もこうした取組を継続し、河川域での海洋ごみ発生抑制の取組を続けていきたいと思っております。

○杉山直樹構成員（環境省東北地方環境事務所環境対策課）

本日皆様から、他国からの海洋ごみが漂着している話がありました。2025年の8月にスイスのジュネーブでプラスチックのライフサイクル全体、製造から廃棄まで、国際的な規制を議論するための会合が開かれましたが、結果として合意に至りませんでした。日本としては今後も各国とのプラスチック規制に関する条約締結に向けて、取組を進めてまいりたいと考えております。

○和美邦彦構成員（宮古市市民生活部市民協働課）

宮古市では、取組方針の1にある県の海岸漂着物等地域対策推進事業費を活用し、指定管理漁港7箇所には海岸漂着ごみ回収ボックスを設置しております。令和6年度の実績では、62トンの回収実績がございましたので、この取組については、引き続き継続していきたいと考えております。

○金野久志構成員代理（大船渡市市民生活部市民環境課）

大船渡市では、湾内では県から委託を受けて珊瑚丸によりゴミの除去事業を実施しておりますし、先ほど宮古市でお話のあった県の海岸漂着物等地域対策推進事業費を活用し、市内の漁港9箇所に回収用コンテナボックスを設置して海岸漂着物等の回収・処理を行っています。今後もこれらの取組を継続してまいります。

○大沢義時構成員（久慈市生活福祉部生活環境課）

久慈市では、ボランティア団体を含む各種団体等で清掃活動等の取組をいただいておりますので、その継続を図りつつ、横の広がり、現場に出ますと生活ごみが目立ちますので、そういったものを見ていただくことで、より対策が進められるよう、市民の行動変容を促すことにつなげていければと考えております。

また、久慈市では海岸漂着物等地域対策推進事業費補助金を使えておりませんので、宮古市や大

船渡市の事例を参考にさせていただきながら、久慈市でも活用できるようにしていきたいと思います。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

予定している議事は以上ですが、その他、皆様から何かございませんか。

【事務局】

事務局から、来年度の協議会についてお知らせします。

現行の第2期岩手県海岸漂着物対策推進計画の計画期間が令和5年度から令和8年度までであることから、令和8年度中に、事務局において次期計画案を取りまとめ、本協議会にお諮りした上で策定まで行う必要がございます。

令和8年度の本協議会につきましては、次期計画に関して御協議いただくこととなり、その関係で例年よりも早めの時期での開催、必要に応じて計2、3回程度開催する可能性がございますのであらかじめ御報告させていただきます。

詳細に関しては、改めて御連絡させていただきます。

○渋谷晃太郎座長（岩手県立大学）

その他、特になければ、これをもちまして議事を終了いたします。ありがとうございました。進行については、事務局にお返しいたします。

【事務局】

皆様大変お疲れ様でございました。

頂戴した御意見については、今後の海岸漂着物対策に生かしたいと思います。

それでは以上をもちまして、令和7年度岩手県海岸漂着物対策推進協議会を終了いたします。

ウェブ会議の中継も終了させていただきます。ありがとうございました。